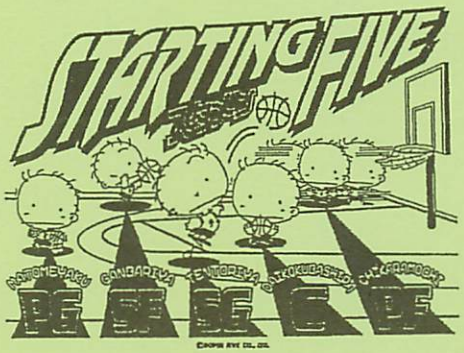
抜粋版

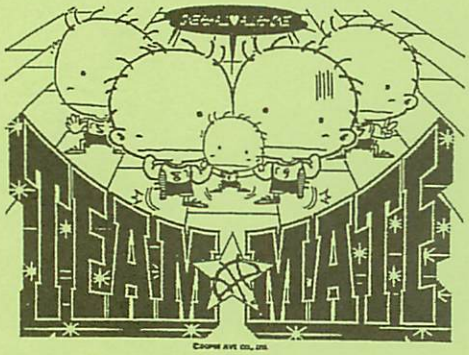
バスケットボールプラザ

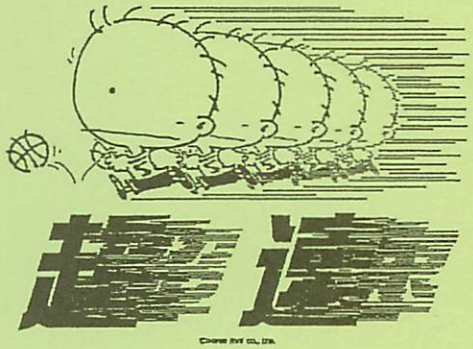
Basketball Plaza *No:37*

2008年5月

NPO法人 日本バスケットボール振興会

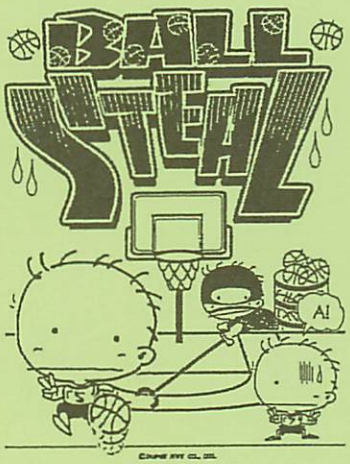


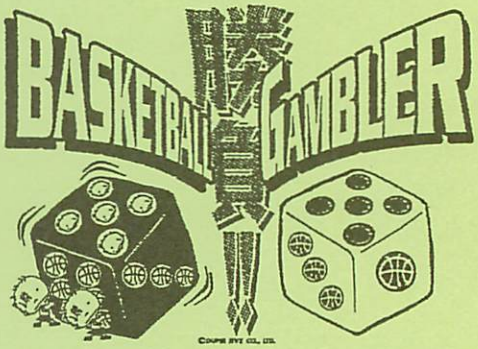




DUPER®

表現の自由人。





DUPER®

デューパーファイブ株式会社
〒130-0023 東京都墨田区立川3-3-5
TEL．(03)3632-7045（代表）
FAX．(03)3632-8327

URL ：http://www.duper.co.jp　E−mail: info@duper.co.jp

目　　次

○　主要国内大会３９回の優勝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・歴史部・・・　3
　　忍者ディフェンスを考案した指導者　　尾崎正敏氏

○　日本女子代表強化開始　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・編集部・・・　6
　　北京オリンピック世界最終予選へ向けて

○　新生ＪＢＬシーズン終了・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

○　日本協会の新たな体制に期待する・・・・・・・・・・・・・　編集部・・・１３

○　会員だより
　　日本バスケットボール界の発展を願って・・・・・・・石川　俊紀・・・１７
　　振興会の新しい活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・笹岡　太一・・・１９
　　私のバスケットボール　・・・・・・・・・・・・・・・手嶋　舞　・・・２１
　　大切にしたい「アマのこころ」・・・・・・・・・・・・青木　勇作・・・２３
　　私とバスケットボール　・・・・・・・・・・・・・・・木俣　晶夫・・・２５
　　畑龍雄先生と父・清水英樹　・・・・・・・・・・・・・清水　英邦・・・２７

○　定例理事会及び総会報告（概要）・・・・・・・・・・・・・　編集部・・・２９

○　故横山房男君を悼む　・・・・・・・・・・・・・・・・・金川　英雄・・・４０
　　横山房男さんを偲んで　・・・・・・・・・・・・・・・・山田　洋子・・・４３

○　事務局だより　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５

○　プラザこぼればなし　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７

○　平成２０年度　日本協会競技日程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８

特　集

―― 主要国内大会３９回の優勝 ――

忍者ディフェンスを考案した指導者　尾崎正敏氏

担当：歴史部会

監督として日本バスケットボール界に名を馳せた人物は数多い。現在 30 歳あるいは 40 歳代くらいまでの人は、おそらくシャンソン化粧品時代に日本リーグ 10 連覇を達成した中川文一氏（現富士通ヘッドコーチ）、いすゞ自動車で黄金時代を築いた小浜元孝氏といった名前を真っ先に挙げることだろう。

しかし、過去にさかのぼれば、彼らを遙かにしのぐ経歴の持ち主がいるのである。

主要な国内大会で実に計 39 回の優勝。前述の二人も遠く及ばない驚異的な記録を挙げている人物がいる。後にその実績と世界的な名声を買われて、日本協会会長をも務めるなど、もはや“名監督”という枠には収まらない活躍ぶりといえる。

女子実業団チームの指導者としてのみならず、日本バスケットボール界の一時代を築いた尾崎正敏氏の足跡と卓越した理論を、本人の証言を交えながら辿ってみた。

氏がバスケットを始めたのは旧制中学３年の時。当時は野球でも何でも、いろいろな大会に引っぱり出されていたが、中でもバスケットは面白そうだと思ったという。そのときの同期は６人全員が健在で「つい最近も会ったばかりで『よく生きていたなあ』なんて言っていたんですよ」と笑う。

その後 1949 年のインターハイに出場し、西日本高校選手権では優勝。早稲田大学に進んでからも 1953 年のインカレで３位に入るなど、選手としてのキャリアを順調に重ねた。

指導者・監督としてのスタートは早かった。1956 年に大日本紡績平野（その後ニチボー平野→ユニチカ山崎→ユニチカと名称を変更）の第三代監督に就任。25 歳、まだ独身である。会社がチームを作ったのが 1950 年。オールジャパンのタイトルを取るほどではなかったものの、全国から選手が集まり始めて強くなっていった頃だった。

「基礎体力をつける練習を徹底的にやりましたよ。ちょうどバレーボールの大松さんがニチボー貝塚で『俺についてこい』ってやっていた時期でね」。

その成果はすぐに現れ、1958 年正月のオールジャパンでチームは優勝。以後、1980 年までの 23 年間で優勝 15 回、準優勝 8 回。3 位以下は一度もない。さらに、全日本実業団選手権大会でも 1959 年から 1966 年まで 8 連覇。日本リーグに移行した 1967 年以降も 7 連覇。通算で 15 連覇である。1964 年 4 月から 1972 年 12 月までの 8 年半以上にわたって国内 171 連勝という途方もない記録をうち立ててもいる。

当時はどのチームもユニチカに土をつけることを目標にしていたという。

それだけの実績の持ち主とあっては、当然ナショナルチームの監督にも声がかかる。1965 年から 1979 年までの長きにわたり女子ナショナルチームを指揮した。そこで有名になったの

が、いわゆる“忍者ディフェンス”だ。

当時から日本と欧米諸国の間には“身長”という壁が立ちはだかり、日本は世界の舞台では苦しめられていた。ソビエト連邦（現ロシア）には、実際に210㎝以上あったと言われるウリヤーナ・セメノワという選手もおり、あまりのサイズの違いに氏も思わず「あんなのとやるのか」と半ばあきれてしまうほど。

食事の際には、他国の選手がバナナを一人でひと房丸ごと部屋に持って帰るのを見て、大笑いしたというエピソードもある。

178㎝が最長身だった日本は、当然まともにぶつかっては勝てないと氏は考えた。

「相手をこっちの土俵に引っ張り込まんとあかん。韓国には韓国の、中国には中国の戦い方があるが日本にはない。それを作らなければと思ったんです。」

そうしてあみ出されたのが、忍者ディフェンスというわけである。氏は、周囲からはアイディアマンとして知られており、氏自身「何か持って生まれたものでもあるのか、すぐピカッと出てくる」と語る。3ポイントルールができる以前から、ユニチカの選手には8メートルの距離からのシュート練習をさせていたくらいだ。ちなみに現在の国際ルールによる3ポイントラインは6メートル25㎝である。

そんな氏の采配により、女子ナショナルチームは1967年チェコスロバキアで開催された世界選手権と、1971年ブラジルで開催された世界選手権大会でともに5位の成績、そして1975年にコロンビアで開催された世界選手権大会では銀メダルという快挙を成し遂げた。言うまでもなく、日本女子チームの歴代最高成績である。氏自身もこのコロンビアでの大会が今までで一番強く印象に残っていると言うが、この銀メダルで初のオリンピック女子種目となったモントリオール五輪にも出場し5位入賞を果たしている。

「脇田代（喜美、元ユニチカ山崎）とか佐竹（美佐子、元第一勧業銀行）なんかは、世界的に比べると大きくないのによくやってくれましたよ。特に佐竹は闘争心があった。一番大事なことですよ」。

自他ともに認める、そんなきめ細かな理論は後に具体的な形で再び世に出ることになる。現在、日本協会の主要プロジェクトになっている“エンデバー”という選手育成制度である。

これは、氏が日本協会会長に就任した際に日の目を見た構想だ。

「これをやれば世界と戦えるようになるだろう、こういう形にしないとあかんと、会長になる時に自分なりに考えて用意したんです。自分がいつどうなるかもわからないし、こういう発想を残しておかんと、と思ったのです」。

左から島本氏、尾崎氏、従野氏

その氏が思うには、今の日本に一番足りないのは、女子の場合ジャンプ力という概念であると言う。45㎝のサージェント・ジャンプ力がある180㎝の選手と、170㎝しかなくても60㎝のサージェント・ジャンプ力を持つ選手とでは、後者が5㎝優位に立つという考え方だ。その他、ジャンプ力をつけることによって滞空力が増し、シュートリリースにも良い影響が現れるしパスの出し方も違ってくるなど、氏の発想は理論的な裏づけのもとに成り立っている。日本の課題として身体的な高さを挙げる人は多いが、ジャンプ力という部分に思いをめぐらせる人はあまりいない。そのあたりに、氏が指導者として卓越しており、成功した理由があるのだろう。氏も「こういうことを言うとアホかと言う人もいるかもしれないけど、意外とそういう見

方が抜けているんですよね」と言うとおり、誰も目を向けないようなところに得てしてヒントは隠れているものだ。

現在は名誉職的な立場でありながら、変わらずバスケット界の行く末に思いを馳せている。

「今、協会はどうなっているのか・・・鬼塚（喜八郎・前協会会長・故人）さんが亡くなられてから、どうしてか会長は不在のままで、理事の改選もしていないという。僕が何やかや言うとあれこれ言われるから何も言わないけど、心配ですよ」。

まだまだ氏の力は、日本のバスケットボール界には必要とされていそうだ。

［取材・従野明宏、島本和彦］

尾崎正敏氏

昭和6年(1931)岡山県出身。操山高校から早稲田大学卒業。

昭和31年(1956)大日本紡績平野の監督に就任、昭和62年(1987)から総監督、平成4年から部長としてチームに携わる。その間、昭和40年(1965)から昭和54年(1979)まで全日本女子ナショナルチームを率い、世界選手権に4回、オリンピックに1回出場。最高成績は昭和50年(1975)コロンビア（カリ）で開催された世界選手権における第2位。また、日本協会の強化委員長や専務理事などを歴任し、途中平成5年(1993)に脳内出血に見舞われながらも見事復帰、平成11年(1999)から平成15年(2003)まで会長として日本バスケットの発展に尽力した。現在は、近畿協会名誉顧問と大阪協会名誉会長等を務める。

監督としての主な戦歴

○国内

全日本総合選手権大会・・・・・・・・・通算15回優勝（8連覇含む）
昭和33年(1958)以降連続23年間決勝進出
全日本実業団選手権大会・・・・・・・昭和34年(1959)以降8連覇
日本リーグ・・・・・・・・・・・・・・昭和42年(1967)以降8回優勝（7連覇含む）
国民体育大会・・・・・・・・・・・・・昭和46年(1971)までに7回優勝
昭和39年(1964)から47年(1972)まで公式戦において無傷の171連勝

○国際大会

昭和40年(1965)第1回女子アジア選手権大会（韓国）	2位
昭和42年(1967)第5回女子世界選手権大会（チェコ）	5位
昭和45年(1970)第3回女子アジア選手権大会（マレーシア）	優勝
昭和46年(1971)第6回女子世界選手権大会（ブラジル）	5位
昭和49年(1974)第5回女子アジア選手権大会（韓国）	2位
昭和49年(1974)第7回アジア競技大会（イラン）	優勝
昭和50年(1975)第7回女子世界選手権大会（コロンビア）	2位
昭和51年(1976)モントリオールオリンピック	5位
昭和54年(1979)第8回女子世界選手権大会（韓国）	6位

以上

日本女子代表強化開始

北京オリンピック世界最終予選へ向けて

［編集部］

日本女子代表チームと候補選手が、6月にスペインで開催される北京オリンピック世界最終予選へ向けて4月1日から強化を開始した。

強化合宿は1回約10日間で、7次に及ぶ強化合宿が予定され、ヨーロッパにも強化遠征にでかける。チームのスタッフと候補選手は後述のとおりだが、強化に専念して世界最終予選を勝ち上がり、暗い話題ばかりだったバスケットボール界に是非とも光明をもたらして欲しい。

強化合宿を始めるにあたり、**島立登志和**女子強化部長は次のようにコメントしている。

「今日から6月の北京オリンピック最終予選に向けて強化スケジュールをこなし、万全の体制にもっていきたいと考えている。日本協会が様々な問題を抱えているが、スタッフ・選手共に今日の日を迎えられたことに喜びを感じている。日本代表チームは小・中・高・大学の頂点に立つメンバーであるべきとし、一貫した指導体制の頂点に立っていくべきなのが日本代表チームである。なんとしてでも北京オリンピック最終予選を勝ちあがり、出場権を獲得したい。」

内海知秀ヘッドコーチ談

北京オリンピック世界最終予選に向けてベテラン選手も召集し、しっかり強化に取り組んでいきたいと考えている。6月の予選まで休みなしで合宿を行う。4月の下旬から5月の中旬までヨーロッパに行き、5月中旬に壮行イベントを開催予定。5月下旬からスペインに入り最終予選に臨みたいと考えている。

選手はリーグ終了後もしっかりと体をつくり、非常にモチベーションが高い状態で集まってくれているので今日からの合宿が楽しみである。

今回はベテランを候補選手に選出したが、濱口選手は走れるセンターとしてチームを活性化してくれると期待している。また、今までの代表選手としてのキャリアは大きな武器である。相澤選手は、昨年まで大神選手に大きな負担をかけてしまっていた部分を軽減できる存在として期待している。矢野選手は、外角のシュートをはじめとした得点力とアテネオリンピックを経験しているというキャリアを重視し、選出した。北京オリンピック世界最終予選に出場する
12名は5月中旬をめどに選出を考えている。

北京オリンピック世界最終予選（予選グループA）では、セネガルをターゲットに絞る。ヨーロッパ勢は非常に強い、レベルの高いチームが集まっており、簡単に勝つことは出来ないだろうが、日本のバスケットの良い点を出すことが出来れば勝機はあると考えている。日本の武器である外角シュートと足を使ったバスケットを展開して対抗していきたい。

ＷＪＢＬが全日本の合宿を訪問して激励

強化合宿中の４月 25 日、ＷＪＢＬの石川専務理事をはじめとして各チームのヘッドコーチが、東京ナショナルトレーニングセンターを訪れ選手たちを激励した。

現場任せにせず何としてもオリンピック出場を果たして欲しいという熱意の表れで、これまでになかった取り組みはおおいに評価できる。日本代表チームの選手やスタッフの努力は勿論だが、それらを陰で支える体制作りも大切なことであり、選手たちの励みになることは間違いない。

激励に訪れたＷＪＢＬのヘッドコーチ陣

４月下旬にヨーロッパへ出発した代表チームは、強豪リトアニア代表チームと３回対戦して１勝２敗の成績を上げて帰国。負けた２戦も下記のように内容的には接戦を演じており、ＦＩＢＡランキング１２位のチームと対等に戦った力はおおいに期待できそうだ。

５月５日	リトアニア	７７――７２	日本代表
５月６日	日本代表	７１――６８	リトアニア
５月７日	リトアニア	６０――５６	日本代表

また、５月 18 日に代々木第二体育館で開催されたリトアニア招待国際試合では、日本代表が粘り粘って最終ピリオドで逆転し意地を見せてくれた。

５月 18 日	日本代表	６６――６３	リトアニア

試合後、世界最終予選に臨む１２名の選手が発表されたが、ベテラン選手を含めたメンバーであり、６月に開催される北京オリンピック世界最終予選が楽しみだ。

全日本女子代表チーム

スタッフ

	氏　名	所　　属
スーパーバイザー	島立　登志和	日本協会女子強化部長
ヘッドコーチ	内海　知秀	日本協会
アシスタントコーチ	萩原　美樹子	日本協会
ドクター	蟹沢　泉	船橋整形外科病院
トレーナー	津田　清美	日本協会
トレーナー	大熊　利恵	日本協会
総括	高橋　雅弘	ＪＯＭＯ
マネージャー	成井　千夏	ＪＯＭＯ

選　手

No	氏　名	P	身長	体重	年齢	所　属
1	相澤　優子	PG	166	62	34	シャンソン化粧品
2	大神　雄子	PG	170	63	25	JOMO
3	吉田　亜沙美	PG	165	64	20	JOMO
4	船引　まゆみ	SG	174	69	29	富士通
5	田中　利佳	SG	173	58	25	JOMO
6	石川　幸子	SF	178	68	29	シャンソン化粧品
7	矢野　良子	SF	178	73	29	富士通
8	内海　亮子	SF	175	69	22	JOMO
9	三谷　藍	PF	182	68	29	富士通
10	矢代　直美	C	182	72	30	日本航空
11	濱口　典子	C	183	80	34	アイシンAW
12	山田　久美子	C	192	118	29	JOMO
——	平　均		176.5	72	28	——————

（年齢・所属は 2008. 3. 26　現在）

P－ポジション
PG：ポイントガード　　SG：シューティングガード
SF：スモールフォワード　PF：パワーフォワード
C　：センター

以上のうち濱口選手は、アトランタオリンピックとアテネオリンピックに出場したベテランで、大神選手、矢野選手、矢代選手の３名がアテネオリンピックを経験している。また、初めて代表候補選手に選出された船引選手もおり従来にも増して多彩な顔ぶれとなっている。大いなる活躍を期待したい。

北京オリンピック世界最終予選

北京オリンピック世界最終予選は6月9日（月）から6月15日（日）まで、スペインのマドリード市において開催される。

出場する12チームは下記の通りで、このうち上位5チームに北京オリンピックへの出場権が与えられる。

出場チーム

アフリカ大陸	セネガル（アフリカ予選2位　ＦＩＢＡランキング17位）
	アンゴラ（アフリカ予選3位　ＦＩＢＡランキング42位）
アメリカ大陸	キューバ（アメリカ予選2位　ＦＩＢＡランキング8位）
	ブラジル（アメリカ予選3位　ＦＩＢＡランキング4位）
	アルゼンチン（アメリカ予選4位　ＦＩＢＡランキング12位）
アジア大陸	日本（アジア予選3位　ＦＩＢＡランキング15位）
	チャイニーズタイペイ（アジア予選4位　ＦＩＢＡランキング22位）
ヨーロッパ大陸	スペイン（ヨーロッパ予選2位　ＦＩＢＡランキング5位）
	ベラルーシ（ヨーロッパ予選3位　ＦＩＢＡランキング30位）
	ラトビア（ヨーロッパ予選4位　ＦＩＢＡランキング26位）
	チェコ（ヨーロッパ予選5位　ＦＩＢＡランキング9位）
オセアニア地区	フィジー（オセアニア予選3位　ＦＩＢＡランキング58位）

グループ分け

グループＡ：日本、ラトビア、セネガル
グループＢ：アンゴラ、アルゼンチン、チェコ
グループＣ：ブラジル、フィジー、スペイン
グループＤ：ベラルーシ、チャイニーズタイペイ、キューバ

競技方法

予選ラウンド：出場12チームを3チームずつの4グループに分け、1回戦総当たりを行い、各グループの上位2チームが準々決勝に進出

準々決勝　：予選ラウンド各グループの上位2チームの合計8チームで準々決勝を行い、それぞれの勝者4チームがオリンピック出場権を獲得敗者は残りの1チームを決定するため準決勝を行う

準々決勝対戦カード		
グループＡ１位	ＶＳ	グループＢ２位
グループＢ１位	ＶＳ	グループＡ２位
グループＣ１位	ＶＳ	グループＤ２位

グループＤ１位　　ＶＳ　　グループＣ２位

準　決　勝　：準々決勝敗者４チームでトーナメント方式の準決勝を行い、勝者が決勝に進出

決　　勝　：準決勝の勝者が決勝を行い、勝者がオリンピック出場権を獲得

北京オリンピック

８月８日から８月２４日まで開催される、北京オリンピックへの女子出場国は次のとおり決まっている。出場資格は、開催国、前世界選手権優勝国と各大陸代表１チームの合計７チームと、今回の世界最終予選上位５チームを合わせた12チームで、相当高いレベルのゲーム展開となりそうだ。

［出場国］

中　国　　：開催国（ＦＩＢＡランキング10位）
オーストラリア　：2006年世界選手権優勝国（ＦＩＢＡランキング２位）
マ　リ　　：アフリカ選手権優勝国（ＦＩＢＡランキング31位）
アメリカ　　：アメリカ選手権優勝国（ＦＩＢＡランキング１位）
韓　国　　：アジア選手権優勝国（ＦＩＢＡランキング７位）
ロシア　　：ユーロバスケット優勝国（ＦＩＢＡランキング３位）
ニュージーランド：オセアニア選手権優勝国（ＦＩＢＡランキング16位）
世界最終予選上位５チーム

なお、チームとは別に国際審判員の平原勇次氏がＦＩＢＡからノミネートされて、オリンピックの笛を吹くことになった。平原氏は早稲田大学卒業で35歳、2007年アジア男子選手権大会の準決勝戦を吹いており、大いなる活躍を期待したい。

ＦＩＢＡダイアモンドボール

また、８月８日から始まる北京オリンピックとは別に、８月２日（土）から５日（火）まで、中国の海寧市においてＦＩＢＡダイアモンドボールというＦＩＢＡ主催の国際招待試合が開催され、日本が出場することになった。この招待試合は４年に１度開催され、ＦＩＢＡから出場依頼のあったチームが出場する。

今回出場国は次の通り

アメリカ、オーストラリア、ロシア、中国、日本、マリ

以上

新生ＪＢＬシーズン終了

ファイナル優勝はアイシン

［編集部］

昨年 10 月 11 日に開幕した新生、日本バスケットボールリーグ（ＪＢＬ）は、3 月 26 日のプレーオフ・ファイナル第５戦をもって今シーズンを終了した。

レギュラーシーズン最終順位

順位	チーム名	勝敗	勝率
1	アイシンシーホース	26 勝 9 敗	.743
2	トヨタ自動車アルバルク	21 勝 14 敗	.600
3	オーエスジーフェニックス東三河	20 勝 15 敗	.571
4	三菱電機ダイヤモンドドルフィンズ	18 勝 17 敗	.514
5	パナソニックトライアンズ	18 勝 17 敗	.514
6	日立サンロッカーズ	16 勝 19 敗	.457
7	東芝ブレイブサンダース	13 勝 22 敗	.371
8	レラカムイ北海道	8 勝 27 敗	.229

８チームによるレギュラーシーズン・リーグ戦の結果、セミファイナルにはアイシンシーホース、トヨタ自動車アルバルク、オーエスジーフェニックス東三河、三菱電機ダイヤモンドドルフィンズの４チームが進出した。

3 月 15 日から代々木第二体育館で開催されたセミファイナルは、３戦で２勝したチームがファイナルに進出する。結果として、アイシンとトヨタ自動車がそれぞれ土付かずで２勝してファイナルに進出。

3 月 20 日からのファイナル戦では、アイシン先勝の後、トヨタ自動車が２連勝して王手をかけたが、その後アイシンが盛り返してついに 3 月 26 日の第５戦までもつれ込んだ。

第５戦では第２ピリオドからアイシンが徐々にリードを広げ、最後は 14 点差をもって快勝し、優勝を決めた。

特にファイナルの各試合は、その日のゲームの中でディフェンスに力を入れて相手の得点を押さえ込んだチームが勝利するという結果となり、会場の代々木第二体育館は熱気につつまれた。

プレーオフ結果

区分　ＳＦはセミファイナル　Ｆはファイナル

区分	試合日	勝者チーム	得点結果	敗者チーム
ＳＦ	3／15	アイシンシーホース	91－88	三菱電機ダイヤモンドドルフィンズ
ＳＦ	3／15	トヨタ自動車アルバルク	100－93	オーエスジーフェニックス東三河

ＳＦ	3／16	アイシンシーホース	70－60	三菱電機ダイヤモンドドルフィンズ
ＳＦ	3／16	トヨタ自動車アルバルク	95－77	オーエスジーフェニックス東三河
F	3／20	アイシンシーホース	81－65	トヨタ自動車アルバルク
F	3／22	トヨタ自動車アルバルク	82－76	アイシンシーホース
F	3／23	トヨタ自動車アルバルク	86－72	アイシンシーホース
F	3／25	アイシンシーホース	88－69	トヨタ自動車アルバルク
F	3／26	アイシンシーホース	93－79	トヨタ自動車アルバルク

優勝したアイシンの**鈴木貴美一**ヘッドコーチは次のようにコメントした。

初戦で勝利して一気にいけると思ったが、連敗を喫してしまい一時は追い込まれてしまった。しかし選手たちがそこから意地を見せてよくやってくれたと思う。ベテラン選手が目立たないところで働いてくれたし、若手もこの１年で成長したと思う。やはりチーム全員で勝利をつかんだという形だ。今日 40 分間チームディフェンスを続けられたのがその証拠だ。

今シーズンは“勝てる”というラインナップが揃ったチームとなったが、勝利を目指したチームで結果を残すことができてほっとしている。

シーズン個人表彰

プレーオフＭＶＰ	柏木　真介	アイシンシーホース
ルーキー・オブ・ザ・イヤー	竹内　公輔	アイシンシーホース
	竹内　譲次	日立サンロッカーズ
コーチ・オブ・ザ・イヤー	鈴木　貴美一	アイシンシーホース
レフリー・オブ・ザ・イヤー	宮武　康介	国際公認審判員

平成 19 年度日本トップリーグ連携機構「トップリーグトロフィー」をレラカムイ北海道代表水澤佳寿子氏が受賞

日本トップリーグ機構が制定する平成 19 年度の「トップリーグトロフィー」を、ＪＢＬ所属レラカムイ北海道の水澤佳寿子代表が受賞し、５月１３日に川淵三郎副会長からトロフィーを授与された。ＪＢＬチームの受賞は初めてで、バスケットボール界にとって久々の明るい話題となった。

日本トップリーグ連携機構「トップリーグトロフィー」

日本トップリーグ連携機構（会長　森　喜朗氏）では、平成 18 年度から加盟８競技９リーグに所属するチームの、マネージメントに多大な貢献をしたゼネラルマネージャーなどに対し、その栄誉を讃えることを目的に「トップリーグトロフィー」を制定している。

日本バスケットボール界の発展を願って

石川　俊紀

1993年サッカー「Ｊリーグ百年構想」が立ち上げられ、Ｊリーグが１０チームでスタートしました。その頃のバスケットボール界は人気の面でも少なからず肩を並べていた、いや、それ以前にはバスケットボールの方がメジャーなスポーツであったと自負していました。ところが十数年たった今、サッカーは野球と並び人気プロ・スポーツとして発展しています。バスケットボール界はどうなっているのか。自問自答しているのは私だけでしょうか。

子どもの夢を壊すな。“ここまでこじれれば、組織を運営する能力も資格も全くないといわざるをえない。日本バスケットボール協会が、新しい役員や予算を決められないまま新年度を迎えた。一昨年日本で開いた世界選手権大会が失敗し、その責任をめぐる内紛から、１年余りも運営ができないという異常な事態である。バスケット協会には全国で小中学生を含め６０万人の会員がいる。漫画「スラムダンク」にあこがれて、バスケットを始めた子どもたちも多い。協会の混乱はかれらの夢を壊す。・・・・”2008.4.8　朝日新聞（社説）記事の一部であります。

１３億円の赤字や２５人（柔道、野球、水泳などから）の追加評議員、世界選手権開催地の評議員の除名などがそもそもの混乱理由であり、８回の評議員会の流会やＪＯＣからの資格停止や補助金カットという処分にまで発展してしまっています。一般企業だったら絶対に責任問題であり、人心一新を願うのは当然でしょう。

最近やっとのことで、代表評議員による選考委員会で新たな役員候補が選出され、新たなスタートを切ることになりました。新会長のもと、新たな日本協会がサッカー界より15年、いや、それ以上遅れたバスケットボール界をどのようにしてメジャースポーツに立て直すのか、難問山積であります。

いつの時代においてもバスケットボール界が隆盛をきわめるためには、広くスポーツの振興と強化・普及は重要な課題であります。「強い日本の構築」「プロ化への検討」は最重要課題でしょう。2004年「プロ化実行検討委員会」が発足したにもかかわらず検討なかばにして頓挫したのは残念でなりません。野球やサッカーに見るように最強のスポーツはプロ・スポーツではないでしょうか。現在のＪＢＬもｂｊリーグも機構やリーグの基本理念を尊重しつつ、チーム（企業、スポンサー）の方針に沿って勝利を追求している姿勢には大いに共感もし、応援もしています。ただ、外から見たときになぜプロとプロに近いリーグが二つもあるのか。私は、この新たな体制で充分な話し合いと検討をしていただき「プロ・チームへの融合」ができるよう期待しています。

今一つの課題は「強い日本の構築」であり、男子は1976年モントリオールオリンピック以来オリンピック出場を果たせていない「全日本の強化」であります。強化の方針や課題は幾つかあるでしょうが、その一つに「外国人選手のオンザコート問題と日本人長身選手の育成」が急務だと思います。過去、現在でＪＢＬの２ｍ級選手は青野、篠原、富永選手をはじめ数多くいました。そして、彼らは高校や大学時代には大いに活躍をし、チームに

貢献をしていました。しかしＪＢＬでは彼らの出場時間と得点は極端に低く、あまりチームに貢献していません（高校・大学での活躍度は91.7%　得点と出場時間は高い値を示す。ＪＢＬでの活躍度は 33.3%　得点と出場時間は低い値を示す。「長身選手育成に関する一考察」2004年　日本体育学会発表）。

当然、ＪＢＬのチームにとっては勝利のため手っ取り早い外国人選手を起用するからです。もっと日本の２m級選手を数多く試合に出場させ、競り合いの中での経験を積ませ、全日本での活躍を期待すべきです。ｂｊリーグも同様だと思います。外国人選手０人とは云いません。獲得人数を総身長で決める。日本人選手だけの出場ピリオドをつくる。などの方法論を検討して一日も早いアジアの王者、オリンピックへ出場への道筋をつけ「強い日本の構築」を期待します。

ここで、少し日本バスケットボールの発祥地、京都について紹介をしたいと思います。現在、私は野中広務前会長（元自民党幹事長）の後を受けて会長を務めています。日頃は手塚理事長のもと、協会役員や各連盟の協力を得て京都府のスポーツ振興計画「子どもスポーツの充実」「競技スポーツの充実」「生涯スポーツの推進」もっと元気な京都のスポーツとも連動させながら各種事業を展開しています。その中身は当然「強化と普及」であり「洛南高校のウインターカップ2008の３連覇に向って」や国体強化、カーニバル（連盟の枠を超えて一同に会し、ミニの交流試合、中学対高校、高校対大学、大学対クラブ・実業団との試合）、日中友好親善（中国大連に中学、高校、大学、クラブの選抜チームが２年に１度訪中）、協会報の発刊、功労者の表彰、また「京都バスケットボールを愛する会」（会長　藤木秀雄一立命大卒）が５年前に設立（会員108名）され、現役のバスケットボール協会を応援してくれています。

また、「近畿は一つ」の合言葉のもと、２府４県（大阪府　尾崎前会長、原田会長、兵庫県　鬼塚（故）、山田（故）、小西前会長、久本会長代行、滋賀県　須田会長、奈良県　出口会長、和歌山県　小村会長と各府県理事長）とも連携をとり、近畿バスケットボール界の発展に尽力を頂いております。

ここまで幾つかのパラグラフに別けて私見を述べてきましたが、新たな日本協会には、この難局を乗り越えて日本のバスケットボール界が発展するよう、更なる活動を期待したいと思います。

結びにあたり、日本バスケットボール振興会には大変お世話になっていることを感謝しつつ、これからも日本のバスケットボール界が発展するようご尽力の程をお願い申しあげ拙文といたします。

［京都府協会会長］

ＲＥＵＳＥ を考える
［環境の総合情報商社］

“地球にやさしく”　どこかで見たような聞いたような言葉。

あなたはリサイクルに関心を持っていますか？

“地球環境をこれ以上汚したくない”これが私たちの願いであるとともに、人類に課せられた大きな課題です。

当社は携帯電話やパソコンなど、鉄を除いた金属（レアメタル）の回収、再生（リサイクル）を主な業務にしている会社です。

日本のバスケットボールの振興、発展を応援します。

リユース・ビズテック　株式会社

〒３３３－０８４２

埼玉県川口市前川２―３３―１

ＴＥＬ　０４８－２６３－７０２３

ＦＡＸ　０４８－２６９－８００９

代表取締役　　永野　鉄洋

molten
For the real game

For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」
私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに
世界に類のないボールと
スポーツエキップメント・メーカーとして
つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 検定球
貼り・天然皮革、7号球

www.molten.co.jp
株式会社 モルテン 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7